

福島からの母子支援ネットワークシンポジウム第2弾

福島からの母子支援について考えよう！

武蔵大学 武田信子

はじめに

- ◎ 何を言っても理解されないと感じる方、何気なく言ったことに傷つく方が当然いるような状況で
- ◎ 最初に確認したいのは
- ◎ 今日ここに集まっている方は皆、何とかしたいと思っている人たちで、
- ◎ でも知らないことわからないことが一杯で、
- ◎ お互いに傷つけあってしまうかもしれなくて、
- ◎ だから、わかりあうために、情報を交換しようという会だということ。

くくり方について

- ◎ 母子 というくくりで進行しますが、父子、あるいは祖父母と子ども、親戚と子ども、などいろいろなパターンがあります。
- ◎ 東京、というくくりで進行しますが、日本全国に散らばった避難親子に対してネットワークや情報の共有が必要であることは言うまでもありません。
- ◎ 同時に大都市特有の問題は意識する必要がありますでしょう。

原発由来の難民発生

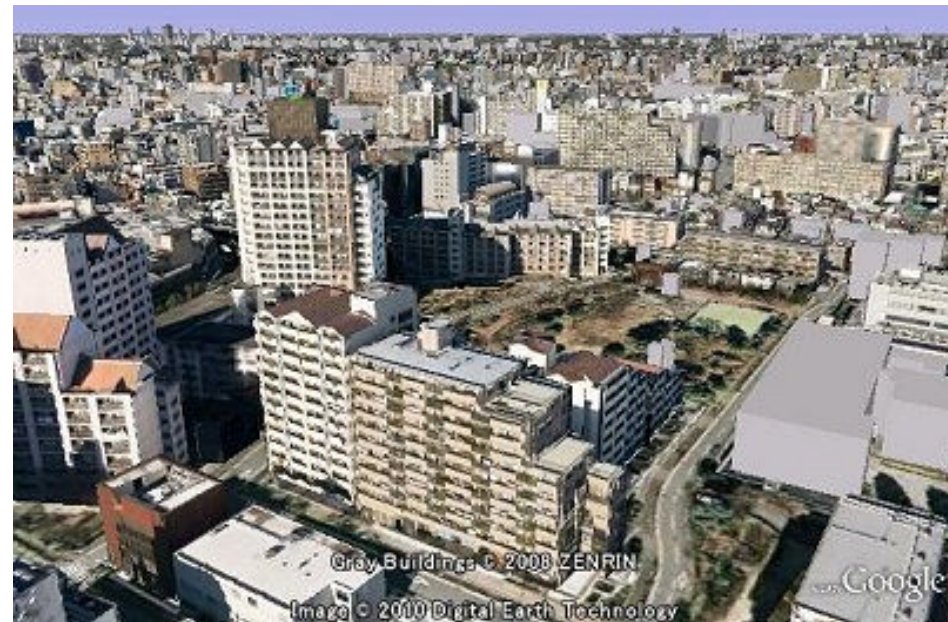
- ◎ 日本の中に、前代未聞の33万人の「難民」が発生したということ　うち6万2610人が福島県外避難者数（24年2月20日現在。1月から2月にかけて減少に転じ、東京都も7525人で45人減少した）
- ◎ 原発に対する大人の見解がどうであろうとも、それぞれの家族がどのような状況であろうとも、子どもたちは急に生活環境が変わってしまい、それに対応を余儀なくされているということ
- ◎ 福島のだの親も、子どもたちを大切に思っていること、できる限り家族が幸せであってほしいと願っていること
- ◎ それを気にかけている東京の人たちがいるということ

被災母子のおかれた立場 —分断と共感

- ◎ 強制避難⇔自主避難
- ◎ 留まる⇔脱出する⇔戻る
- ◎ 離婚⇔別居⇔同居
- ◎ 核家族⇔三世代以上同居
- ◎ 県内避難⇔県外避難
- ◎ 実家へ避難⇔単独避難
- ◎ 家族・親類の賛成⇔反対
- ◎ 住民票：税金の支払い・広報や支援の違い
- ◎ 仕事：ある⇔なし⇔変わる
- ◎ 賠償される⇔されない
- ◎ 生活費：ある⇔なし
- ◎ 原発関係者⇔非関係者
する⇔しない
できる⇔できない

母子のおかれた立場 —心身のストレス

- ◎ 誰が信頼おけるのか？
- ◎ どの人を信じていいのか？
- ◎ どの情報が正しいのか？
- ◎ 自分自身さえも揺れる気持ち・定まらない気持ち
- ◎ 家族の中での意見の相違
- ◎ 離れることによる食い違い
- ◎ 自分だけでは決められない：子どもの心身の不安
- ◎ 新しい場面への緊張
- ◎ 無責任・無自覚な発言・行為への傷つき
- ◎ 刻々と変わる状況変化への対応の必要性
→ストレス
- ◎ (母子の場合) 子ども相手に弱音が吐けない・心配をかけられない
- ◎ ストレス発散の場のなさ



原発被害者の 二次・三次被害

- ◎ 遠慮・我慢・要求しない
- ◎ 迷惑をかけないように静かにしている
- ◎ 差別されるのではないかという不安
- ◎ 公の場で福島県人・福島から来たことを名乗らない・方言で知られないようにしゃべらない。

↑

支援の手が届かない原因にもなっている

生活・子育ての違い

福島



東京

- ◎ 三世代同居・親類縁者
- ◎ 地域社会
- ◎ 一軒家
- ◎ 自然
- ◎ 密な関係
- ◎ 世帯当たり人数 1.99人 急に母子家庭に（でもそれが目立たない社会）
- ◎ 無縁社会・地理の不案内
- ◎ うさぎ小屋・アパート
- ◎ 人工
- ◎ 音も匂いも灯りも速さも言葉も違う世界
- ◎ 他人は関係なし・孤独死・餓死すら
- ◎ 生き馬の目を抜く競争社会
- ◎ 東京の子育てはただでさえ大変！

子どもの年齢による 状況の違い

乳幼児

- ◎ 実家でなければ母子のみの生活、孤立・情報不足
- ◎ 行政が把握できない・していない部分がある
- ◎ 遊びに対する支援
- ◎ 親の休息時間の支援
- ◎ 心身の発達への影響の不安
- ◎ 保育園不足

就学児童・生徒

- ◎ 学校を通じた人間関係・情報ルート
- ◎ 行政による把握が可能
- ◎ 教育に対する支援
- ◎ 進学・学費の不安
- ◎ 子どもの対人関係・精神的課題・心身の発達への影響の不安
- ◎ 浪江町子ども対象アンケート

他県の場合（1）山形

- ◎ 1万3千人（山形市5千人）
- ◎ NPO法人やまがた育児サークルランド
- ◎ 通常の活動に加えて少人数で次々と増える避難者に対応・サークル作りの支援
- ◎ ツイッターによる情報提供
- ◎ 2年間の住宅借り上げ支援による行政の人数把握→情報提供可能
- ◎ 被災三県でないと義援金・寄付金が落ちてこないという問題→助成金申請が大変
- ◎ すぐに福島に帰れる距離（戻ってしまう距離）定住の意志が薄いことが却って支援を難しくする
- ◎ 雪国からのSOS：生活の違い・必需品や交通手段の違い←各地のNPO子育て支援者からの支援
- ◎ 「山形に来られてよかったね」を目標に
- ◎ 一軒家（ユニセフ）で当事者同士のピア・サポートによる支え合いを
- ◎ 米沢市の避難者支援センター
おいで お待ちしてます～
<http://yonezawanet.jp/oide/>

他県の場合（２）新潟他

- ◎ 9千6百人
 - ◎ 交流拠点県内7カ所
 - ◎ 新津子育て支援センター
育ちの森：登録数86家族
 - ◎ 福島県・幼児妊産婦支援
プロジェクト（宇都宮大
学）新潟チーム
 - ◎ 方言の違い、雪国の生活
 - ◎ 福島県親子対象の行事を
数回 途中でニーズをヒ
アリング
 - ◎ ママ茶会・セミナー・ノー
バディーズパーフェクト
（全て抽選）
 - ◎ 母子を迎える子育て支援者
の研修
 - ◎ バザー・情報誌発行など
- ☆福井・富山・石川への避難
- 各500人以下 のんびりと
余力を持って受け入れてく
れる風土

母子のニーズ

(山形でのヒアリングより)

具体的な情報・交流

- ◎ 地元の同じ立場の人との情報交換
- ◎ 放射線量・食事・他の人はもろもろの状況に具体的にどう対応しているのか事例を知りたい
- ◎ 同じ状況の人ととにかくいろいろとお国ことばで語り合いたい。
- ◎ いつでも連絡が取れるような関係・いざというときのネットワーク・有益な情報の入手経路が必要

具体的な支援

- ◎ 金銭的・物質的支援・就労支援
- ◎ 母の休息・リラクゼーション・心理的ケア
- ◎ 子どもの心身の発達を支える支援
- ◎ 支援されるばかりでなく自分が役に立てる機会や場も欲しい

支援の形（１）

一時的脱出の支援 （子どもだけ、親子）

- ◎ キャンプや合宿・遠足

福島在住母子の避難先での避難母子との交流会

- ◎ 週末のみ脱出（共働き）

- ◎ 平日のみ脱出（母子）

福島県民同士の子育てひろば・サークル

永住の支援

- ◎ 移住（国内外）

- ◎ 養子（子どもだけ祖父母宅疎開など）

- ◎ 新しいコミュニティへの歓迎・情報提供・人間関係づくり

- ◎ 支援者が、ニーズや対応のハウツーを学ぶこと

支援の形（２）

当事者のニーズ把握

- ◎ 生活支援・物資支援・住宅支援・金銭的支援（期間限定にすぎない・復興交付金が使えない・被災三県ではない・移転先の税金が使いにくい）
- ◎ 心理的支援（福島的事情を知らないと難しい）
- ◎ 情報提供・出会いの場づくり（当事者同士・現地の人と当事者）

情報収集と広報

- ◎ 問題提起：公的支援（被災者の人数・実態の把握）及び私的支援の必要性を行政に・一般市民に認識してもらう
- ◎ 共感者・理解者数が、無関心・差別者数を圧倒的に超えること
- ◎ 自分たちがまず状況を知る・自分たちにできることを考える
- ◎ ネットワーク化 つながる

1年を超えて：決断の時

「住みにくかった東京」 でいいのか？

- ◎ いつまで続くのか、決断を迫られる：永住か帰還か
- ◎ 見えない被害→将来への見えない不安（感情を否定はできない）
- ◎ 職業・収入・人間関係...
限界：福島に戻る人たち

住み続ける人たちへ

- ◎ これから必要な支援は何か？
- ◎ これから来る人たちをどう迎えるか？

する・される関係でなく

- ◎ 福島からの当事者の皆さんが、自分たちで動きやすいように、動けるように、東京の人たちが動く
- ◎ 事情や地理や状況や気持ちのわかる福島の方が、福島の方を互いに支えるピア・サポート態勢を考える
- ◎ 新しい土地・東京の人たちも、一緒になってお互いに支え合って、新しい生活を作る
- ◎ 誤解や差別・独りよがりの思いこみが生じないように、一般の人たちに情報提供し、理解を求めていく
- ◎ メディア、インターネットの活用と取材等による無用な負担の予防
- ◎ 他には？

今日の主な流れ

- ◎ 現状を把握しよう：NPOの支援、東京の支援と今後の課題、ネットワーク、国の支援と今後の課題、限界と可能性
- ◎ インタビュー：福島県内の母子はどうしているか？福島の視点で語る現状
- ◎ ワークショップ：これからの支援について：その促進要因と阻害要因を考えよう（オブザーバーも可）
- ◎ これから、私はなにができるか？